

氏名(本籍地)	かん たかひこ 菅 隆彦
学位の種類	博士(経済学)
学位記番号	経博(経済)第179号
学位授与年月日	平成31年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科、専攻	東北大学大学院経済学研究科(博士課程後期3年の課程) 経済経営学専攻
学位論文題目	『道徳感情論』の現代経済学的再解釈 —アマルティア・センによる解釈への批判と、進化経済学を用いた再解釈—
博士論文審査委員	(主査) 教授 守 健 二 准教授 古 谷 豊 准教授 黒 瀬 一 弘

論文内容の要旨

本稿の目的は、経済倫理学と進化経済学の2つの観点から、アダム・スミス著『道徳感情論』を再解釈し、複数の学術分野において新たな知見を得ることである。

『道徳感情論』研究、あるいはスミス研究には、無論のこと大量の知の蓄積がある。それぞれの時代の文脈に応じて、様々な観点から、同書は解釈されてきた。その中の1つの潮流として、主に1990年代以降における、経済学の枠をときに超えた他分野の観点からの、同書の再解釈がある(田中2017:12)。各分野の研究者が、同書から知見を得て各分野の現代的問題の解決に生かそうと、試みてきた。また、他分野の観点からの再解釈によって、スミス研究自体も知見を得てきた。他分野の観点からの再解釈という潮流は、現在まで続いている。例えば、同書が行動経済学の研究成果を予見していることを示すもの(Ashraf et al. 2005)、同書を制度派経済学の観点から再解釈するもの(Tajima 2007)、行動経済学的なモデルとの差異を明らかにしつつ、効用関数を用いて同書における主体の行動を定式化するもの(Bréban 2012)、脳科学の観点から再解釈するもの

(Kiesling2012) , 経験的な道徳的判断手法の観点から再解釈するもの(Konow 2012) , 合理的選択理論の観点から再解釈するもの(Khalil 2017) , が存在する。

これらの中で本稿が着目するのが、アマルティア・センの『道徳感情論』解釈である。センは、主流派経済学が想定する狭隘な人間観を「合理的な愚か者」と呼び、その現実妥当性を痛烈に批判してきた。経済倫理学におけるセンの影響力は大きく、現在まで、彼が提唱した諸概念についての議論が続いている。センは、『道徳感情論』の現代的意義を高く評価してきた。その理由の1つが、同書中の「良俗の一般的諸規則」(以下、一般的諸規則)と、ある種の「コミットメント」との強い関連性である。しかし、本稿で示すように、両概念は基本的に整合しない。このことは、このコミットメントの存在の有無についての、現在進行形の論争に影響する。センが両概念を誤って関連付けたことは、このコミットメントが存在しないことを、含意しかねない。経済倫理学における現在進行形の論争に寄与することが、本再解釈の利点である。

また、センは、『道徳感情論』における「中立的な観察者」に着目し、ジョン・ロールズの「無知のヴェール」に対して優位性を持つとした。センによれば、無知のヴェールは、中立的な決定を行うための概念であるのに、実際には中立的な決定を行うことができない。無知のヴェールは、決定の主体となる集団に内在する偏向を、克服できない。一方で、中立的な観察者はこの問題を克服できると、センは主張した。本稿は、補論として、センの中立的な観察者解釈について論じる。センの主張が新たな観点から裏付けられることを示す。また、中立的な観察者概念の政治哲学における有効性について論じる。これらの議論により、センの『道徳感情論』解釈をより深く理解することができよう。また、中立的な観察者の判断は一般的諸規則と整合するから、この議論は、一般的諸規則についての議論ともみなしうる。この意味で、本議論は、一般的諸規則についての他の議論を補足する。

加えて、本稿は新たに『道徳感情論』を進化経済学的に再解釈する。本稿が着目するのは、一般的諸規則の形成過程である。この形成過程は、主体達による継続的な他者の観察によって進行し、試行錯誤的学習によって進行するとみなされる。主体の試行錯誤学習の過程は、進化ゲームモデルによって定式化されてきた。その中から、本稿はレプリケータダイナミクスを採用し、一般的諸規則の形成過程を定式化する。本定式化には、主に2つの利点がある。1つ目は、「道徳感情の腐敗」に代表される、非理神論的状况についての議論に寄与することである。道徳感情の腐敗は、同書の社会秩序形成論に矛盾すると考えられてきた。しかし、本定式化によって生じる解釈からすれば、両者は矛盾しないとも考えられる。2つ目の利点は、センの経済倫理学に対する寄与である。本章のモデルは、コミットメントの発生を説明するモデルの、1つとして位置づけられる。さらに、本稿は、この一般的諸規則の形成のモデルを応用して、道徳感情の腐敗を再解釈する。基本のモデルにおいても、道徳感情の腐敗は再解釈可能であるが、応用モデルにおいては別の形での再解釈が行われる。応用モデルにおいては各戦略について、基本モデルには無い解釈が付加される。このモデルには、以下に述べる利点がある。定式化の結果として、同感という概念が道徳感情の腐敗の危険を孕むとする、先行研究の解釈が正しいことが、裏付けられる。

本稿は、以下のように構成される。第1章において、良俗の一般的諸規則とコミットメントにつ

いての、センの解釈を批判的に再検討する。第2章において、中立的な観察者についてのセンの解釈を補足した後に、政治哲学における同概念の有効性について論じる。第3章において、良俗の一般的諸規則の形成過程を進化ゲームモデルによって再解釈する。第4章において、前章のモデルを応用し、道德感情の腐敗を再解釈する。終章において、本稿を総括する。第1章においては、自己目標選択を侵害するコミットメントに、一般的諸規則が密接に関わるとする、センの主張の妥当性を検証する。コミットメントとは、「個人の厚生と行為の選択とのあいだの密接な結びつきを壊すこと」である。コミットメントには、自己目標選択を侵害しないものと、侵害するものの、2種類がある。コミットメントは、主体の自己目標の追求の過程で生じたのかもしれないし、自分自身の目標追及を制約した事に起因するかもしれない。本稿は、一般的諸規則が、自己目標選択を侵害するコミットメントに、基本的には整合しないことを論証する。一般的諸規則が自己目標選択の侵害に整合しない理由は、大きく2つある。第1に、一般的諸規則は、その形成過程からすれば、主体達の目標追求と基本的に整合する。一般的諸規則は各主体が自然に抱く感情に基づき、自発的に形成されたものである。第2に、一般的諸規則は最高存在の諸法であり、それが来世以降に報償や処罰を与えるとの認識は、自己目標選択を合理化する。元来、主体達の目標追求と整合する一般的諸規則は、最高存在の意図に整合するという理由からも合理化される。

第2章においては、ロールズの無知のヴェールが孕む問題を、中立的な観察者のアプローチが回避しようとする、センの主張を補足する。センは、中立的な観察者の持つ中立性を「開いた中立性」と呼び、無知のヴェールが持つ中立性を、「閉じた中立性」と呼んだ。「閉じた中立性」の問題とは、「手続き的偏狭」と「排他的無視」である。手続き的偏狭とは、決定を行う集団が、自らに固有のバイアスに対処不可能なことである。排他的無視とは、「焦点集団の行う決定によって生活上の影響を被る、焦点集団外の人々の声を排除しよう」ことである。センによれば、中立的な観察者のアプローチは、これらの問題を克服しよう。しかし、センの主張は、彼が言及しない観点からも裏付けられる。正義の徳についての記述からは、スミスが排他的無視に強く批判的であることがわかる。正義の徳は、排他的無視の禁止を要求する徳である。センの見解を補足した後に、そこから一歩進んで、中立的な観察者の政治哲学における有効性を論じる。同概念は、以下に述べる理由から、中立的な判断に失敗することが有りうる。中立的な観察者の見方は、その形成過程から判断して、ある集団に閉ざされている可能性がある。中立的な観察者は、主体が観察できない範囲にいる、人間の見方を考慮できないかもしれない。また、慈恵と普遍的仁愛についての記述によれば、人間が考慮に入れられる他者の範囲には限界があり、自身に身近な存在や自身が所属する社会に限られる。道德感情の腐敗についての記述からは、腐敗した倫理基準を持つ人間が、一定程度社会に存在することがわかる。このことは、腐敗した中立的な観察者の存在を含意する。腐敗した中立的な観察者は、非中立的な判断を行う。

第3章においては、良俗の一般的諸規則の形成を、進化ゲームモデルの1つである、レプリケータダイナミクスを用いて再解釈する。一般的諸規則は、主体達が他者を繰り返し観察することによって形成される。この形成過程は試行錯誤学習の1種とみなされる。主体は、他者と感情を共有するか否かを判断基準として、自身の感情の正当性を試行錯誤的に学習する。各感情の正当性の確信

度合いは、各プレイヤーの混合戦略に反映される。混合戦略として表現される確信度合いは、ゲームの利得に依存して変化する。ゲームの利得は、他者との感情共有の喜びを表す。本モデルにおいては、每期、 n 人のプレイヤー集合の中で、全プレイヤーが2人1組ずつランダムマッチングされる。マッチングされた2プレイヤーは、対戦において、相手の選んだ戦略を知る。この過程が、一般的諸規則の形成過程における、他者を観察する過程に相当する。このマッチングと対戦が連続的に幾度も繰り返される。一般的諸規則は、特定の混合戦略プロファイルとして定義される。一般的諸規則が漸近安定となる状況が場合分けされ、各場合が成り立つための必要十分条件が示される。この分析結果をもとに、一般的諸規則の形成過程を再解釈する。『道徳感情論』においては、一般的諸規則の形成と矛盾するような状況も存在する。この状況についても、本モデルを用いた再解釈を提示する。最後に、これら2つが混在する状況についての、整合的な再解釈を提示する。

第4章においては、第3章のモデルを応用して、道徳感情の腐敗論の再解釈を行う。本章では、戦略の解釈の仕方を、前章から変更する。本章では、戦略の1つを、腐敗論における徳の道に対応する戦略とみなす。そして、もう1つの戦略を、腐敗論における財産の道に対応する戦略とみなす。前章で定義された一般的諸規則は2種類存在するが、両者を区別する必要はなかった。本章での解釈の付加により、この2つの区別が必要になる。本モデルでは、利得表に基づいて3種類のプレイヤーを定義する。同調タイプ・財タイプ・徳タイプの存在を仮定し、これらのプレイヤー間の対戦を分析する。財タイプの存在が、道徳感情の腐敗を特徴づける。本章は、財タイプの存在の効果を明らかにする。財タイプが存在するときのゲームと、しないときのゲームを比較することにより、その効果を明らかにする。

論文審査結果の要旨

本論文は、アマルティア・センによるアダム・スミス著『道徳感情論』の解釈を批判し、それに対置する形で、進化経済学のモデルを用いて同書の主要概念を独自に再解釈する試みである。本論文の根底には、主流派経済学の狭隘な人間観を批判してより現実妥当性をもった人間行動の理論化を提起するセンの経済倫理学を高く評価し、とりわけその合理的核心を「コミットメント」「アイデンティティ」「エージェンシー」など、「自己目標選択」を超えしうる人間行動に求め、これらの存在を否定する諸批判からセンを擁護するという問題関心が貫かれている。しかしながら、著者によれば（第1章）、この論争におけるセン批判は、セン自身による『道徳感情論』の不適切な解釈に負うところが大きいとする。つまり、本来「自己目標選択」に属するはずのスミスの「良俗の一般的諸規則」をセン自身が自らの「コミットメント」と同一視したことによって、「自己目標選択」を超えするものとして「コミットメント」の存在が否認される事態を招いていると。そこで著者は（第3章）、リプリーケーター・ダイナミクスを用いて、スミスの「一般的諸規則」の形成過程を独自にモデル化し、いかに「自己」の自然な感情が「一般的諸規則」に進化していくかを

明らかにし、これによって事実上、「一般的諸規則」は「コミットメント」とは異なり、（進化した）「自己目標選択」であることを示した。

また同様に（第2章）、人間行動の「開かれた中立性」についても、センは自らそれをスミスの「中立的な観察者」と関連づけたが、そこから「一歩進んで」、慈恵の限定性や道徳感情の腐敗に見られるような「中立的な観察者」の中立性の限界、当概念の政治哲学的有効性の限界を看過してはならないとする。それとの対比を通して著者は、センのクロスボーダーなアイデンティティの有効性を浮き彫りにしている。以上のことを根拠づけるために著者は（第4章）、上述のリプリケーター・ダイナミクスを用いて「中立的な観察者」の形成過程をモデル化し、そこで道徳的腐敗が発生する可能性を論証している。

本論文は、スミス『道徳感情論』全体系の解釈としてみれば、一面的に特化したものであり、取り扱われる二次文献についても選別的であることは否めない。また形成過程のモデルも、とりわけ試行錯誤的学習のプロセスに関してさらなる精緻化を要する。しかし、センの「コミットメント」「アイデンティティ」をめぐる国際的論争に対し、キーとなる「中立的な観察者」「良俗の一般的諸規則」概念の理論モデル化という新たな論拠を提示することによって貢献することが期待できる。よって審査委員会は本論文を、博士論文に求められる水準に達していると判断し、合格と判定する。